

1. マリアニストカリスマについて

MLC会員が、マリアニストカリスマを他の人に説明できるようにしましょう。
わたしたちがグループ内や小教区などで信徒マリアニストとして生きる時、もっとも特徴的で大切にしなければならないのがこのマリアニストのカリスマです。

マリアニスト・カリスマとは、なにかについて、ジャルディーノ師の本を見てひも解いてみたいと思います。

わたしたちが、マリアニスト・カリスマに沿って生きることができれば、人生の新しい可能性を体験させてくれます。ですが、マリアニスト・カリスマを、他の方々に明確に表現し理解してもらうのは困難であるとわかっています。「ホタルの光」と「照明の明るさ」ほどの違いだと描写して終わってしまうのがおちです。カリスマは体験であり、聖霊の神秘とでもいう性格を帯びているのです。「もの」ではないのです。あくまで体験を積み重ねてだんだんと理解できてくるものなのです。

言葉や詩によって愛の意味をおぼろげながらつかむ事ができますが、「愛」の全体像をきちんととらえることは決してできないのと同じです。わたしたちが、愛しているときに、愛を理解します。カリスマは、愛のように、わたしたちの殻をうちやぶり、新しい世界にわたしたちを導き、新しい可能性や将来性へと開かれる働きがあります。

マリアニスト・カリスマを体験することは非常に重要なことです。より深く理解し、明確に表現できることもまた大切なことです。そこには、聖霊の働きがあることを理解することが非常に重要なのです。

わたしたちマリアニストは、毎日の生活についての理想や将来の姿を描いています。これらのわたしたちの理想や将来像は、現在、生きている時代や各自の場において神の国の実現に向けての働きかけであるとも信じています。

マリアニストの創立者たちのように、わたしたちは、自らの描く理想や将来のビジョンと今の現実との間の「ギャップ」に生きています。マリアニストの創立者である、シャミナード、アデル、マリーテレーズは、自分たちの生きている時代と場所で、フランス革命がもたらした政治的、精神的、宗教的、社会的混乱のさなかにあって、不安のなかで、「ギャップ」を感じて生きていました。

この「ギャップ」を感じる心は、今を生きる私たちにとって大変重要な働きをなしているのです。「ギャップ」がもつ緊張の中で、聖霊が働き、恵みが生じ、カリスマとして噴出するのです。

日常生活における様々な神秘を理解したいという望みはいつの時代でもあります。わたしたちは、様々な出来事の意味を、生きる意味を探しています。人生における「人間を超えるなにかもっと大きなものの存在」を望んでいます。この望みは、あらゆる時代、あらゆる文化に共通するもので、人間のもつ不安定さ、不完全さ、限界の感覚からきています。

この人間の持つ不安定さといった感覚から、自分が「より大きなもの」を望んでおり求めているのだと気づかされるのです。聖アウグスティヌスが、「主よ、あな

たはわたしたちをあなたご自身に似せて想像されました。それで、わたしたちの心はあなたのうちに憩うまでは安らぎを得ないのです。」と彼自身の体験から述べています。

諸宗教は、人生における「より大きな何か」を提示しています。何らかの解決や平和、人生を充足させる何らかの道、を提示しているのです。

イエスは、「私は、彼らが命を受けるため、しかも豊かに受けるために来た」といわれました。仏陀（ぶつだ）は苦しみの解放へと導く八つの道（八正道）を提示しました。

この道は、宗教的回心として体験されます。ウィリアムジェームスはこのことを次のように述べています。この回心は、私の実在よりも大きな私の外あるいは内にある何かと結びつける何らかの出来事、あるいは、気づきであり、不安の解消へと向かう解決ないし方向へと通じています。キリスト教の伝統では、「救い」、仏教の伝統では、「涅槃(ねはん)」と呼んでいます。

阿羅漢果（あらかんか）：小乗の覚り。釈迦が弟子に教えた最初の覚り。[四聖諦](#)（ししやうたい）『この世は苦の世界である』と、[十二因縁](#)（じゅうにいんねん）『人々が自らの存在が空（無我）であることに気付かないことが苦の原因である』と、[八正道](#)（はっしやうどう）『苦を取り除くことが出来る』との三を悟ること。※涅槃（ねはん）、泥洹（ないおん）：滅、滅度、寂滅、不生、無為、安樂、解脱等と訳す。

キリスト教の伝統においては、カリスマとは、自分たちが体験する神秘を理解しようと試みている人たちの為に神が「愛」を表示しておられることを体験することと理解しています。わたしたちは、この神秘の良い知らせがそこにある信仰と希望のうちに、このカリスマにアプローチするのです。

創立のカリスマ

シャミナード師は、聖霊の働き、恵み、力を体験し、自分の人生、夢、日常生活と関連付け結びつけたのです。この結びつけが、社会変革のための洞察、動機つけ、方向を与えたのです。わたしたちは、神秘の中に覆い隠されていようとも、人生のための福音があると確信しています。わたしたちは、自分自身のためだけでなく、教会と世界のために、わたしたちの夢と毎日の生活の間を生き活きと結びつけるものを、恵み、聖霊の賜物と呼びます。この聖霊の体験をカリスマと呼び、ある人にとっては、創立のカリスマとなるのです。コリント人への手紙1の12章4節から7節にカリスマを理解するための箇所があります。この箇所は、初代キリスト教共同体が共に生活する中で体験した現実を理解する

パウロは、神の霊が目に見えるものとなるプロセスについて話しています。「霊の賜物」と呼ぶもの、知恵、識別、思慮、勇気、主を知ること、主への恐れ（イザヤ11：2-3）の中に聖霊の影響を認めます。「霊の実り」と呼ぶもの、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔軟、節制(ガラテア5：22)の中に、聖霊の影響を認めます。聖霊は、わたしたちの人間的な能力を用います。カリスマを、信仰者の自然的な能力の中に、描写できます。これらの能力は、この世に神の国を建設するために与えられているのです。

シャミナー師は、彼の人生を変え、わたしたちが、マリアニスト家族と呼んでい

るものへと導いた強烈な聖霊体験をしました。フランス革命のもたらした荒廃の後、どのようにして教会と社会を再建するかということについて、柱の聖母のもとで、祈っていた時におおきな聖霊体験をしたのです。

シャミナード師は世界を変革した一つの行動に注意を集中しました。聖霊がキリストを世にもたらすためにマリアを包んだことです。彼は、霊示を受けました。イエスの母、ナザレのマリアの役割を、歴史において永続するものとして理解したのです。マリアは、胎内にイエスを宿し、神の国をもたらすというイエスの使命に向けて「聖家族」の中で、イエスを育て教育したのです。この神の国は、人間の尊厳、自由、正義、連帯、和解として体験されるものです。そのためにシャミナード師は、マリアニストの霊性と使徒的アプローチの源泉として、受肉に焦点を合わせました。

カリスマは何を引き起こすのでしょうか。特別に創造力に富むカリスマは、創立者と同じような体験を持つ人々の追従を引き起こします。これらの人々は、創立者の体験と一体感を持ちます。自分の中にあるこの現実気がつくとき、自分の洗礼の約束の果たし方を生き抜こうとします。カリスマは、特別な神体験のかたちである霊性と、世界をより良い方向にする方法である奉仕の仕方へと導きます。このカリスマを経験した人々は、特別な行動の仕方を考えだし、修道会、小さな信仰共同体、学校などのような、他者のための創立者の中心的な洞察を体現する団体を創立します。

シャミナード師は自分の新約聖書を他の人に示し、その人たちが自分と同じ個所を強調していることを指摘しました。なにかが彼らの中で共鳴するのです。共鳴する箇所は、救いの歴史におけるマリアの役割と関わっています。マリアの役割が創立のカリスマを生みます。創立のカリスマの中に、マリアニスト特有の霊性、奉仕の仕方を見出すのです。

1821年の有名なマリアニスト家族の黙想指導において、シャミナード師は次のように述べています。

「神は、ただ単に自分の聖化のためだけでなく、フランスにヨーロッパに、全世界に信仰を復興させ、今の世代を誤謬から守るために、わたしたちを召しておられます。何と崇高な、何と大きな企てでしょうか！ 何と聖なる、寛大な計画でしょうか！ これは、神の栄光と人々の救いを探し求めるひとにとって、とても魅力ある計画なのです。神は、多くの人々の中からわたしたちを選んでくださったのです。」

考えてみましょう、「神は、・・・全世界で信仰を復興させ、今の世代を誤謬から守るために、わたしたちを選んでくださった」。一度、この神のお召しの意味を理解すると、わたしたちが世の中で行おうとする働きにおいて、わたしたちを押しとどめるものはなにもないのです。マリアニストの霊性は、受肉を中心とするもの、わたしたちがこの世界を真剣に受け取るということ志しています。神がこの世に来られた方法は、一人の女性、マリアを通してでした。マリアニスト霊性は、単なる信心ではなくて、人格的な成長と世の中に神の国を建設するという行動へと私たちがかりたてるのです。

マリアニスト・カリスマ

わたしたちはカリスマを、人間と教会のより広い体験のなかで、神の人間に対する無条件の愛という「良い知らせ」をもたらす聖霊の体験として理解します。マリアニスト特有のカリスマは、「マリアの宣教者」のように簡潔に、あるいは、より詳しく「世の人々への良い知らせとしてキリストをこの世にもたらしたマリアの使命を継続するために、マリアによって形造られるという体験」として表明できます。

マリアニストの専門の研究者であるエドワード・ベンヨック師は、マリアニストカリスマの要素を一言で表明することは不可能であると述べ、・・・大切なことは、構成要素に名前を付けることではなくて、この構成要素をどう説明するかなのですと述べています。わたしたちはこの説明を常にしなければなりません。たとえば、次のように要約できます。

「教会の奉仕の為に、マリアと契約を結び、宣教の共同体に集う、深い内的精神をもつ信徒、修道者、司祭」

また、レイモンド・フィッツ士は、この構成要素を次のように述べました。

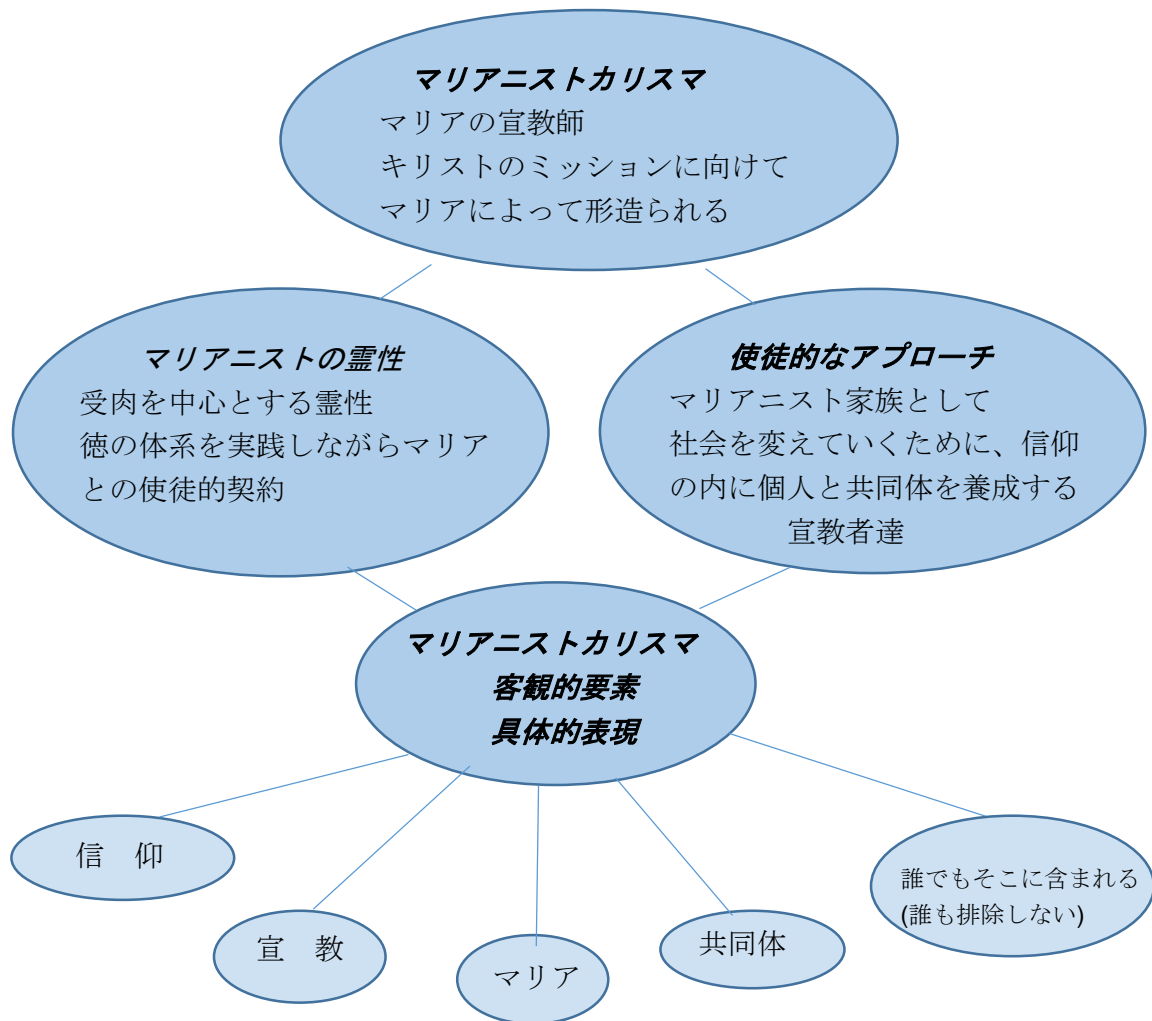
「信仰において養成されること、共同体において育てられること、共通の使命に結ばれた多様性と宣教の精神を持つこと、マリアの心を中心とすること。」

わたしたちの多くはこれらの表明を通してマリアニスト・カリスマと出会うのです。

マリアニスト・カリスマの理解を見ましょう。

世の中の人々の必要に応じてマリアニストの応答である恵みの分野に入っていくためのドアとしてみてください。人はそれぞれ違ったドアに惹きつけられます。

マリアニスト・カリスマの理解



共同体の皆で考え話し合うテーマ

1. カリスマに関して

カリスマに関する根本的な聖書の箇所を読みましょう。

(第Iコリント12:4-7、イザヤ11:2-3、ガラテヤ11:2-3 参照)

そして、カリスマとは何かを考えましょう

2. 心の信仰とはなんでしょう

3. 宣教的な精神

インカルチュレーション (キリスト教の日本への土着化) に関して

考えてみましょう

どのような層に広がっているでしょうか

4. マリアとの契約

5. 宣教共同体はなぜ必要なのでしょう

6. 誰でもそこに含まれるとはどういうことでしょう

参考資料：ジャルディーノ師 (約束と道)・・・マリアニスト翻訳委員会翻訳中
GIFTS&TASKS記事